

## 書評

Tamara S. Wagner, *The Victorian Baby in Print: Infancy, Infant Care, and Nineteenth-Century Popular Culture*

(Oxford: Oxford University Press, 2020)

森本 真美



著者タマラ・S・ワグナーは2002年にケンブリッジでPhD(英文学)を取得後シンガポールで職を得、シンガポール国立大学を経て現在は南洋理工大学(Nanyang Technological University)人文科学カレッジで準教授として教鞭をとっている。以前本研究会ニューズレター(2007年第6号)にエッセイを寄せていただいたことをご記憶の方もあられるだろう。巷間言われるイギリスからの「頭脳流出」ではあるが、意欲的なその後の研究のなかには、アジアで得たインスピレーションが反映されていると思われるものも多い。

本書は、19世紀イギリスの出版文化のなかに登場する〈赤ちゃん〉—学術的ではないが、ある種の情緒を伴ったイメージを想起させる表現としてこの訳語を採用する一のみにも焦点を当てた初の試みだという。子どもを取り上げた研究は枚挙にいとまがないが、たしかにこの特殊な時期を単独の分析対象としたものは前例がないかもしれない。

ヴィクトリア朝の赤ちゃんのアイコン的な表象には、いくつかのお決まりの言語表現(クリシェ)がある。名高い古典から三文小説まで、ヴィクトリア朝の小説群には「ぽっちょりとした」「健康的で」「バラ色の」赤ちゃんの描写が溢れている。一方で、社会小説や慈善団体のパンフレットでは、この理想像を暗転させた写し鏡ともいえる、瘦せて青白く死に瀕した赤ちゃんの、これもおさまりの描写が悲哀と義憤を誘う。明暗表裏で一体をなすこの赤ちゃん像は、挿画やポスター、クリスマスカードにいたる種々のテキストや図像を通じて同時代を席卷した。のみならずそれは現代にも継承され、ヴィクトリア朝文化はもとより、この時代そのもののイメージを構築する大きな要素となっているとワグナーは指摘する。

ヨーロッパの子ども史研究は、アリエス・テーゼの妥当性をめぐる議論を中心に1970年代以降に活気を帯びた。後続研究者の主張はさまざまだが、19世紀的な進歩史観がこの領域においては今なお命脈を保っており、子どもたちの悲惨な状況が改善されてゆく長い道程にあって、19世紀は近代的孩子観の確立期として位置づけられた。とりわけこの変化を先駆けて経験したイギリスと北米では、啓蒙思想とロマン主義の流れをくむ子ども像と子ども期の理想化が進んだと理解されている。

ヴィクトリア朝の子どもについての研究が数多ある中で赤ちゃんが、「学術研究の対象として周縁化されてきた」ひとつの理由は、ジェンダーという分析概念の登場にあるだろう。子どもの表象や児童文学の研究にあって赤ちゃんは周縁化されおり、同時代においてもその表象は女性の母性を引き立たせる、あるいはその欠如による悲劇を暗示する付属物的な扱いにとどまっているとするワグナーの言は当を得ている。

歴史学においても状況は同様である。1980年代以降の女性史ブームの中で、ヴィクトリア期イギリスの女性史研究は特に活況を呈した。子ども史同様、同じ時期に勢いを得ていた社会史の影響を受けて女性たちの日常生活にも積極的に目が向けられ、出産や子育て、母子関係や保育の研究が進んだが、あくまでもその眼は母親である女性にむけられていた。また教育史の分析対象は基本的に学齢期の子どもであったし、経済史の赤ちゃんは、乳幼児死亡率と、家族経済に負の影響を与える変数として以外には議論されることはなかった。

本書は4章から成るが、最大の特徴は子ども史を含めた広範な領域の先行研究の概観を含む長い序章にあるだろう。19世紀の赤ちゃんは感傷化と商品化をともないつつ、出版文化の中で崇め奉られた。その際枕詞さながらに用いられたのが前述のような定型表現であるが、実際には同時代の諸資料にはさまざまな赤ちゃんの姿が描かれている。ワグナーはそのような「風変わりな赤ちゃん」とその描写がテキストの中でどのような効果をもたらしたかという文学研究としての命題に取り組むとともに、赤ちゃんの表象と乳幼児が生きた現実との関係の解明にも意欲を示す。

第1章はディケンズの描くコミカルな赤ちゃんに注目する。ディケンズ作品はヴィクトリア朝の子どものイメージ形成において大きな影響力を持つ

たとえられるが、彼の作品に登場する赤ちゃんは、滑稽さと苦難の象徴という両義性を備える。本章では彼の描く赤ちゃんと作中でのその役割が、『憑かれた男』(1848)、『荒涼館』(1853)などの分析で明らかにされる。

第2章で取り上げられるのは育児書である。母性の重要性が説かれ母乳育が推奨され始めると、育児は中流階級の家事の中で質量ともに大きな位置を占めるようになり、その負担は母親に押しかけた。不安にかられた母親たちに情報を提供したのが育児書であったが、本章は、架空の人物の自伝という形式で書かれた、ウォーレン夫人による物語風の育児書の分析を中心に、印刷メディアによる育児の商業化を検証する。

第3章では、文学研究の対象としては等閑視されてきたシャーロット・ヤングが取り上げられる。幅広いジャンルにわたる多作で知られるこの作家の作風は、宗教性とともにリアリズムを特徴とする。ヤングは家事としての育児をリアルに描いたが、著者は執筆時期によるその描写の変化に着目し、背景にあった子育て助言の競争現象とその影響を論じる。

扇情小説の中の赤ちゃんを取り上げた、最終章となる第4章が本書の出色であろう。ヘンリー・ウッド夫人やメアリ・エリザベス・ブラッドン、ウィルキー・コリンズらの小説に登場する「センセーショナルな赤ちゃん」は、ベビーファーム有料託児所で虐待され、不義の子として捨てられ、誘拐されて売られ、間違った育児法のために命を落とす。このような赤ちゃんの衝撃的な姿は、育児情報の洪水に翻弄される母親たちをさらに不安に陥れるとともに、赤ちゃんをそのような危険にさらす社会問題に大衆の目を向けさせた。

結論部ではヴィクトリア期の赤ちゃん関連産業についての言説が再検討される。情報化社会の黎明期に生じたこの市場と構造で、ワグナー自身も母として経験し本書の着想にも結び付いたという現代の子育てをとりまく環境を読者に想起させ、本書は結ばれる。

このように本書では、ヴィクトリア朝の出版文化のなかの赤ちゃん像が、じつは多様な主張のせめぎ合いの上に成り立っていたことが示された。赤ちゃんの描写に注目することで新たな角度から作品を読み直すという文学研究としての目的は、ここに鮮やかに達成されているといえるだろう。

著者の専門領域の外にある子ども史研究の部分的な欠落それ自身は瑕疵に過ぎないが、その点に関連して、歴史学を専門とする立場としての

評者の反省を含めた課題は残る。本書は赤ちゃんを分析対象として中心に据えることには成功しているが、タイトルに掲げられているのが赤ちゃん (baby) であるにもかかわらず、実質的に議論されているのは赤ちゃん期 (babyhood) である。人間としての〈子ども〉と、観念としての〈子ども期〉は異なる。観念によって成る文学のテキスト分析から示される子ども観の多様性と同様に、この時代の子どもの現実もまた多様であることを歴史研究者は知っている。しかしその現実の断片から子どもの歴史がはたして構築できるのかという疑問は、アリエス以降の研究者のおそらく誰もが自覚し、いまだ悩み続けているテーマなのである。

幼い子どもは口承文化の世界に生きる存在である。子ども史においてもオーラル・ヒストリーの試みは成果をあげてはいるものの、これが可能なのはある程度以上の年齢の子どもと子ども期に限定される。赤ちゃんは、記述はもちろん口承による記録もできない。また「物心つく」以前の記憶を普通の人間は持たないので、自身の経験として赤ちゃん期が回想されることもなく、したがってエゴヒストリーの対象ともならない。「科学的な」研究手法の採用でこれが可能だとする主張もないではないが、地に足のついた実証を旨とする歴史研究者がその種のを生理的に忌避する傾向は変わっていないし、変わるべきでもないだろう。赤ちゃんについて歴史学が明らかにしてきたことは少なくない。だがヒュー・カニンガムが述べるように「事実は無条件に真実を語ってはくれない」。<sup>1</sup>

語らない赤ちゃんを主体に据えた歴史研究のヒントとして、本書は同時代の人びとのさまざまな「感情」の可能性を示唆してくれる。振り返ればアリエスとその後継者たちがつねに意識してきたのも、子どもをめぐる感情であった。アリエスはもとより、70年代に出たロイド・デ＝モスの「心理発生的」歴史解釈、エドワード・ショーターの「感情革命」、そして本書で言及されるロレンス・ストーンの子親関係の分析にもそれは顕著である。アナール派の潮流をくむ過去の子どものと子ども期の心性の検討は、子ども研究における重要な位置を占めてきた。

心性史から独自の「感性の歴史学」を開いたアラン・コルバンは、近年感情史を提唱しているが、赤ちゃんはまさに彼が挑む「記録も記憶も残さなかった者」であろう。事実に真実を語らせる要素として、赤ちゃんをと

りまく「感情」はどの程度有効であるのか。フィクションの世界について本書が示したのは、感傷化された子どもは感情の言説でこそ語られる存在であったという事実でもある。本書は、学際研究として子ども学の領域における文学からの有効なアプローチの手法を例示したのみならず、感情史としての子ども史の可能性を示したという点でも意義あるものと位置付けられるかもしれない。

偶然のタイミングながら、わが国における近年のジェンダー史・女性史研究のいくつかは、本書の議論との接点が多いことを付言しておく。ぜひ併読を勧めたい。<sup>2</sup>

#### 注

1. ヒュー・カニングム、北本正章訳『概説子ども観の社会史—ヨーロッパとアメリカにみる教育・福祉・国家』新曜社、2013年、22頁。
2. 三井淳子「子育て支援体制の構築をめざして—世紀転換期の母親たちのネットワーク」伊藤航多他編著『欲ばりな女たち—近現代イギリス女性史論集』彩流社、2013年所収、中田元子『乳母の文化史—19世紀イギリス社会に関する一考察』人文書院、2019年など。

—神戸女子大学教授